

第 14 回 IAGG Master Class on Ageing in Asia 参加体験記

野里 陽一

(日老医誌 2026 ; 63 : 256-257)

2026 年 5 月 22 日から 24 日にかけて、フィリピン・マニラの St. Luke's Medical Center Global City にて開催された「14th IAGG Master Class on Ageing in Asia」に参加する機会をいただきました。今回のテーマは「Geriatric Syndromes」であり、アジア各国から集まった若手医療者とともに、老年医学における重要課題について学びました。

マニラに到着してまず感じたのは、都市の持つ圧倒的な活気でした。高層ビル群が立ち並ぶ一方で、ローカルな街並みや活気あふれる人々の暮らしが共存しており、急速な経済成長を続けるフィリピン社会の勢いを肌で感じました。人口は日本と同規模でありながら年齢中央値は約 26 歳と非常に若く、日本とは社会構造が大きく異なります。超高齢社会の日本とは対照的な若い社会を目の当たりにし、高齢化という現象が各国の歴史や文化、人口構造の中で異なる意味を持つことを実感しました。

会場となった St. Luke's Medical Center Global City は、フィリピンを代表する私立高度医療機関であり、世界水準の医療環境が整備されています。しかしその一方で、街を歩く中では経済発展の恩恵を十分に受けられていない人々の生活も目にしました。老年症候群や包括的ケアについて最先端の議論が行われる一方で、それらの医療やケアが社会全体へどのように届けられるのかという課題についても考えさせられました。高齢者医療は医学だけで完結するものではなく、社会保障や経済格差とも密接に関わることを改めて実感しました。

本プログラムの特徴は、一方向の講義だけではなく、5~6 名程度の少人数グループに分かれて研究発表や症例検討を行う双方向型の学習形式にありました。アジア各国から集まった参加者が同じテーブルを囲み、互いの研究や診療経験を共有しながら議論を深めていく構成と

なっており、講義で得た知識をすぐに実践的な議論へ結びつけることができました。

講義では、Frailty, Sarcopenia, Falls and Mobility Disorders, Cognitive Impairment and Delirium, ICOPE, Polypharmacy, Multimorbidity など、老年症候群を構成する重要なテーマが取り上げられました。日本からは国立長寿医療研究センターの荒井秀典先生と名古屋大学の梅垣宏行先生が講師として参加され、それぞれ Frailty および Multimorbidity についてご講演されました。日本を代表する老年医学研究者がアジアの若手医療者に向けて知見を発信されている姿は大変印象的であり、日本の老年医学が国際的な教育にも貢献していることを実感しました。

私は研究発表セッションにおいて、「Optimizing Blood Pressure Management in Older Adults : Balancing Cardiovascular Protection and Geriatric Syndromes」というテーマで発表を行いました。発表では、75 歳以上高齢者を対象とした厳格降圧療法に関するシステムティックレビュー・メタアナリシスと、要介護高齢者に対する実践的降圧管理コンセンサスについて紹介しました。高齢者高血圧診療においては、心血管イベントの予防だけでなく、転倒、起立性低血圧、認知機能低下、QOL 低下といった老年症候群とのバランスを考慮する必要がある、機能状態に応じた個別化医療の重要性について各国の参加者と意見交換を行うことができました。

また、症例検討では、80 歳代女性が転倒を契機として不安が増強し、その後、不動、食欲不振、せん妄、排尿障害、褥瘡、低栄養へと進行した症例について議論しました。参加者それぞれが異なる医療制度や文化的背景を踏まえながら意見を出し合い、多職種介入、家族支援、栄養管理、リハビリテーションなど多面的な視点から問



小グループのメンバー（一番左 ファシリテータの慶熙大学医学部家庭医療学 Chang Won Won 教授，左から3番目野里）

題解決を試みました。単一疾患では説明できない老年症候群の複雑性や、一つの出来事が高齢者の生活機能全体に大きな影響を与えることを改めて認識しました。

各国参加者との交流も非常に刺激的でした。老年学は地域固有の文化や社会背景に依存する側面と、国境を越えて共有される普遍的課題の双方を有する学問領域です。参加者はいずれも非常に意欲的で学習熱心であり、自国の高齢者医療をより良くしたいという強い使命感を持っていました。英語圏の参加者の発言力や議論の展開力には圧倒される場面もありましたが、それ以上に、アジア各国で未来の老年医学を担う優秀な若手人材が着実に育成されていることに大きな刺激を受けました。

また、今回のプログラムを通じて、AI技術の波が世界各国の老年学分野にも確実に浸透しつつあることを強く感じました。特に印象的だったのは、症例検討後の発表準備において、多くのグループが短時間で完成度の高いスライドを作成し、論理的かつ洗練されたプレゼンテーションを行っていたことです。実際の診療現場を見



小グループでの研究発表をする参加者（野里）

学したわけではありませんが、学術的議論や教育の場において、AIやデジタルツールが既に自然な形で活用され始めていることを実感しました。

日本は世界でも類を見ない超高齢社会を経験しており、その経験から得られた知見がアジア各国の老年医学教育にも還元されていることを実感しました。高齢化の課題先進国として、日本が果たすべき役割の大きさを改めて認識しました。しかし同時に、各国でも老年学研究は活発に展開され、優秀な若手人材が着実に育成されており、日本の老年医学が今後も国際的な存在感を維持し続けるためには、次世代人材の育成と国際的な発信をさらに強化していく必要があると感じました。

今回の Master Class は、老年症候群に関する知識を学ぶだけでなく、アジア各国の仲間とともに高齢者医療の未来について考える貴重な機会となりました。この経験を今後の診療、研究、教育活動に還元し、日本の老年医学の発展に少しでも貢献していきたいと思います。

最後に、本プログラムへの参加機会を与えてくださった日本老年医学会ならびに関係者の皆様に深く感謝申し上げます。